島木健作全集　第二巻

昭和52年4月15日　印刷
昭和52年4月20日　発行

定価3800円

著作権者との
申合せにより
検印省略

著　者　島木健作
著作権者　朝倉　京
発行者　佐藤今朝夫
制作・尾沼　汎

〒170　東京都豊島区巣鴨 3—5—18
発行所　株式会社　国書刊行会
電話（917）8287（代表）振替・東京5—65209

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

島木健作全集

第二巻

国書刊行会版

第二巻目次

一　過程……五
一　風景……四一
繭……五九
壊滅後……六九
死に近く……九五

一つの轉機……一二七
典型……一五一
頭をあげて歩け……一六九
老年……一七五
バナナの皮……二〇七
生活……二二五
百三番……二四五
金魚……二五九

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第一義の道……二七三
轉向者の一つの場合……三二七
戯　畫……三六三
解　題……三七五

夕やけが丘の上の空を彩りはじめた。暮れるにはまだ少し間のある時刻である。部屋のなかはだがもうう す暗く深い靜けさにひそまりかへつてゐる。十人にちかい男たちがこの二階にありとは思へぬ靜けさである。風が出て來たらしい。寢靜まつた夜などはその遠吠えの音がきこえもする海の上を渡り、さへぎるもののない平地を走つてこの高臺の一軒屋にぢかに吹きつける二月の寒風である。はげしく吹きつけ、細目にあけた窓の隙間からはいる餘勢に壁に下げた何枚かのポスターがかさかさと鳴つた。人々は寒さにふるへ、しかしなにか縹渺としたおもひを誘はれながら、屋鳴りをさせて遠く吹き拔ける風の行方にぢつと耳を傾ける。——

誰も立上つて灯りをつけようとするものもない。壁によりかかり、言ひ合したやうに膝を立ててその上にうつぶしてゐるもの。長々と横たはり仰向けになつて眼を閉ぢてゐるもの。どれもこれもぢつと動かずにゐる彫像のやうな彼らの姿態は、そのまま過去一ケ月の餘にわたる精根を傾けつくしてのはげしい生活を物語り顏である。口を開くものういほどに疲れ切つてゐるのであらう、だがそれにもかゝはらずこの部屋の隅隅にまでも行きわたつてゐる何か張り切つたこのけはひはどうだ。事實、ものいはぬ彼らの胸はたつた一つの共通の期待に、——のるかそるか當面のすべてをそれにかけて悔いなかつたその期待にいまふくれ上り、はち切れんばかりになつてゐるのだつた。何か言ひ出してみることはこの際妙に控へられる氣持だつた。か

うしてゐるあひだにも時はしだいに迫りつゝある。その最後の時のために、逸り猛つてくるものをぢつと引き締め、溢れ來る感情をひた押しに押さへてただもだしてゐるのである。はじめからあてには出來ぬ期待なら、氣も樂であり、問題はなかつた。事實最初は力の限りたたかつて見ること自體に意義をおき、必ずしもそれの勝敗に執着はなかつたのである。だが中頃狀勢は思ひもかけぬ好轉を見せ、時が迫つて來るにつれて阻むものなき一つのいきほひをさへ示したのであつた。それは上げ潮のひた押しに押して來る姿に似てゐた。はじめは誰でもが捨てて顧みなかつたものだけに、今にはかに現實にそれがつかめる見込みがついたとなるとそれだけ逃してはならぬそれへの執着は強く大きかつた。ただそのいきほひで最後の瞬間まで押し切り得るかどうかが疑問だつた。その疑問がいま明らかにされようとする直前の、この息づまるやうにいらだたしい切迫した感じである。

「ちえつ、遲いなあ、一體どうしたつていふんだ。」

うつぶしてゐた一人がふいに顏をあげると、つひに堪えかねたらしい聲を太い溜息とともにあげた。同時に部屋のなかがにはかにざわめきだした。緊張が破れ、ほつとした氣持に息づき、すると急に活々とした多辯が人々をとらへはじめるのであつた。

「もうわかつた頃だと思ふんだがな。」と一人が腕をあげて時計を見ながらいつた。「開票のすつかり終るのは何時の豫定なんだ。」

「四時頃の筈だが——しかし少しはおくれるだらう。」

「今頃は傳令の奴、いいニュースを持つてやきもきしながら自轉車を走らせてゐるよ。」と一人が笑ひながらいつた。

「おい、みんな行かう。」とふいに大きな聲でいつて荒々しく音を立てて立上つた男がある。それまで部屋のまん中に長々と寢そべつてゐた一人である。立上ると彼はやにはに腕をふりはじめた。

「ぢつとこんなにして、馬鹿みたいに面をつき合していつまでも居れるもんか。みんな行かうぜ。開票最後の素晴らしい場面が見られないのは癪ぢやないか。」

「行かうか。」と二三人が乘つて來た。

「そりやだめだ。」と若いしかし落着いた聲がおさへるやうにいつた。鼠色のジヤケツの男である。

「なぜだ。」

「なぜつて、事務所をガラ空きにするわけにやいきやしない。」

「だからよ、一人留守番をおいて行きやいいぢやないか。」

「子供みたいなことをいふなよ。俺たちが今ここに待機の姿勢でゐるのはなんの爲だ。おそかれ早かれ結果がわかるんだ。その結果にもとづいて方針を立てて一刻も早くそれぞれの責任地區に向つてふつ飛ぶやうにするためぢやないか。」

「ふん、もつともなことをいひやがる。」と彼はまたそこにごろりと横になつた。「まるで御馳走を前にしてお預けの形だな。」

人々はみんな聲をあげて笑ひ、同時に彼の最後の言葉に思ひ出したやうに壁の一方を見やるのであつた。四里はなれた市の公會堂をそれにあててゐる開票場から、二時間前に彼らの傳令が持ち歸つた結果が表になつてそこに貼られてゐる。島田信介四千六百八十五票！　彼は次點者である。當選圏内の最下位者××會の中川誠也とのひらきは三百票にすぎない。そのときから二時間後の今までの間にそのひらきにどんな變化が生

じてゐるかが問題なのだ。そのひらきが埋められ、さらにその上に飛び拔けうる見込みでもあるといふのか？　それがあるのだ。願望が描き出すあさはかな幻影ではなくて、現實にそれが滿さるべき充分な根據があればこそ、彼らのおもひはいよいよ一つの方向に驅り立てられずにはゐないのである。報告のもたらされた時の開票にはまだ數ケ村が殘されてゐた。前田郡の小島、添山、前川の三ケ村がそのなかにはいつてゐる。その三ケ村は島田がその代表として選出された無產者黨の母體をなす、事實においては一身同體といつていい貧農組合の壓倒的な地盤なのだ。小島の、添山の、前川の、有權者數合せて××人。そのうち組合員××人はたしかだから……。横になつてゐた一人が急に起上つた。かくしをさぐり、鉛筆と手帳とをとり出した。さつきから何回目かの、豫想を文字にして紙の上にならべるたのしみにまたふけらうといふのである。

屋上をわたる風が遠くへ落ちて行く。又それが來るまでにはちよつとの間のとだえがある。そのとき家の道路の上にずずずーつといふもののすれ動く音がきこえた。かたんといふ何かの音とそれにつづいて人の足音がする。自轉車だな、と聞耳をたてたとたんにもう滑りのいい表戸が開いた。

喊聲をあげて四五人が、一つの塊になつて狹い階段をかけ下りた。――

口々に何ごとかをいひながら、肩にかけんばかりにするその手をはらひのけるやうにして、賀川服の若ものが先頭になつて階段をあがつて來た。どうだつた、結果は？　とすぐうしろにつづく男がいつてゐる。ちえつ、勿體ぶりやがつて、と最後に階段を上つた一人が低くつぶやいた。

「杉村？」

若ものは眼で探した。鼠いろのジヤケツの青年がすぐその前に顏を出した。內かくしから出した紙きれを彼の手に渡しながら、

「敗けた、」

と低く一言だけいつた。

多分に危惧を孕む事柄の成つた大きな喜びの前には往々何らかの技巧が行はれがちである。事實をまつすぐにそのまま投げ出さず、一時は反對のものに見せかけてそれのもたらす喜びを益々大きなものにしようとする、さういふ場合が多いが、ましていま報告を持つて來たのは二十まへの若ものでふだんからいたづらいたづらした眼がよく動くのであつた。人々はさういふ彼に期待し、彼のいつた一言とはまるで反對のものを讀みとらうと、その目もと口もとに見入るのであつた。すぐにもそれがほころびはじめるであらう……だが若ものの表情はいつまで經つても硬いのである。

「ふうん……さうか。」と杉村は手にした紙きれを見ながらいつた。みんなどつと彼によりそつて來、肩と肩とをすり合すほどにして彼の手許に見入つた。とふいに杉村はある種の感動のこもつた叫びごゑをあげた。

「どうしたんだ、こりや、……敗けたのは仕方がないとして島田は次點でもないぜ。島田は山内に敗けてるんだ。山内の奴、どうしてこんなにのしたもんだらう。」それから、讀むぞ、といつて彼は讀みはじめた。

――

聞き終つて彼らは聲をのんだ。豫想とはあまりにみじめな相違だつた。最後にものをいふ筈であつた、かの三ケ村の票數はどこへ行つたか、農民派と稱して二大政黨とは中立で立つた山内が最初微弱な勢力でありながら、なぜに最後に近づくに從つて次第にピッチを上げて來、つひには島田を凌ぐにいたつたか、彼らはそれらについて今はもう何を考へて見ようともしなかつた。急に忘れてゐた疲れが以前に倍したいきほひで襲ひかかつて來た。考へ、動く、あらゆるはたらきをやめてこのままずるずると泥沼のやうな眠りのなかに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

身を落してしまひたかつた。その場所をもとめるかのやうに彼らはあらためて部屋のなかを見まはした。日がおちると闇の這ひよる足は早かつた。暗くなつた部屋のなかは今朝ものを片づけ、掃除をしたままの姿である。筆や墨汁や、紙の類は片隅によせた小机の上におかれ、謄寫版は久しぶりに箱のなかにおさめられてこれも片隅にあつた。中央には火の消えた火鉢が一つ、燒きすてた反古紙の灰が山をなしてゐる。まる一ケ月のあひだの足の入れ場もない亂雜を見慣れた眼には、がらんとした部屋の廣さは妙に寒々とした感じである。はげしい言葉を書きつらね、赤インクで彩つたポスターが風にはたはたと音をさせてゐるのを見た時、過去一ケ月の餘にわたる苦鬪の跡が一瞬のうちに彼らの腦裡をかすめた。すべては無駄な努力に終つたのかとの實感は理窟を越えたものであつた。殘るものはただえたいの知れない暗がりに身心をひきずりこむ抵抗しがたい虛脫感あるのみである……。

ふたたび表の戸が開く音がし、すぐに一人の男があがつて來た。見上げるやうに高い、横もがつしりとした男である。

「ああ、小泉、」

と低く叫んで杉村はその方へ走り寄つた。

「どうしたんだ、何をしてるんだ、灯りもつけんで。」

灯りがつき、彼らは白い光りのなかに複雜な感情のこもつた眼と眼を交した。小泉はそこに立つて、自分の肩ほどの仲間の顏を見下すやうにして、一人々々ぢつと見据ゑた。彫りこんだやうに凹凸の深い彼の顏はいつも變らぬ靜寂を湛えながら、その眼の輝きはさすがに押へ得ぬ興奮を示してゐる。みるみるその顏に血がのぼつた。どんな感情が仲間たちをとらへてゐるかを見拔いたのである。鋭い聲が威壓する力に滿ちて彼

の口をもれて出た。

「何をくだらんことを考へてるんだ。何一つまだ終つてやしないぢやないか。はじまつたばかりだ、……しなけりやならん仕事はわかつてゐる筈だ。みんなすぐに部署につくんだ。」

まつすぐに部屋のまんなかに進み、てきぱきした事務的な口調で彼はつゞけた。

「今後の連絡、會合についての打合せをしみんなそれぞれの責任地區へ歸るんだ。勝つても負けても選擧の結果報告のための、部落の集會、演說會の開催は豫定どほりだ。今度の選擧中の事實にもとづいた暴露材料は、いま縣本部で印刷してゐる。明日の午後には屆くだらう、……それから××反對の示威運動は必ずやる。その具體的な計畫はこれもほぼさきに打合したとほりだ。今晩これから本部で開く常任委員會で最後的決定をする。日取はその直前まで發表しない筈だからみんな動員組織をしつかり固めておいてくれ。」

そして彼は靜かにそこに坐つた。常任委員會の代表としての自分と、各地區の書記との間に二三の打合せをするためにである。

彼らは小泉につづいて坐り圓形をつくつた。今までぼんやりしてゐた彼らの顏はよみがへつたやうになり、自分自身を取り戻して見えるのであつた。民衆の投票をめぐつてのたたかひをいつのまにか當選か否かといふことにのみ限つて考へる考へ方にずり落ちてしまつてゐる自分たちを見直した。彼らは俄然あたらしく展開され來つた情勢を見た。そしてそのなかにどう處して行かねばならぬかについて自覺した。信賴しきつたものにたいする從順さで、小泉のいふところに從ひみなそれぞれの意見をのべ、何を爲すべきかについて決定したのである。短い時間でそれがすんだ。彼らは立ち上り、ずり落ちた洋袴を引きあげしつかと皮帶をしめ、帽子を眞深にかぶり、あわただしく階段を下りて外へ出て行つた。——

最後に殘つたのは小泉と杉村とであつた。

「今晩は？」と小泉が内かくしから何か小さく折りたたんだ紙をとり出し、杉村に手渡しながら訊いた。

「うん、九時から支部長會議をやることになつてゐる、」と杉村は答へ、受けとつたものを靴下のなかにおしこみながら、ここ一週間逢はなかつた小泉の顏をすぐ眼の前にしげしげと見た。かうしてまぢかに見ると、線の深く刻みこまれた顏だけにさすがに疲勞のあとが色濃くあらはれ、彼の心勞をなしてゐるものの何であるかが一目で知れるのである。二人は彼らだけで話し合はなければならぬ事柄について簡潔な二三の言葉をかはした。押しあひ、ひしめきながら奔騰してくるものをうちに感じながら、杉村は辛ふじてそれを咽喉のあたりでせきとめた。個人的には小泉と自分とによつて代表され、――しかしそれはもとより彼ら二人のものではなく、一つの組織のものである、意見、方針にたいする不滿と非難とを思ひつめた言葉でいひ現さうとしたのである。それは從來とても漠然とした形で杉村の内部に芽生えてゐた、今その方針の明かな失敗を語る事實を見るに及んでそのものはにはかにはつきりとした形をとるにいたつたのである。だがそれを言葉にして投げつけることを許しはしない冷然たるものを小泉の顏に杉村は見た。彼は眉一つ動かさうとはせぬ。（奴はまた强引に押し切らうつていふんだ！）小泉は何らの相剋するものを自分の内部に感じてはゐないのであらうか？　敗けたこと自體は問題ではない、ただそれがもたらす影響が一つのおそるべき方向をとつて來るときは……

突然ある不吉な考へが芽生え、それはみるみる大きなものになつて行くのであつた。小泉はもう杉村の存在は忘れたもののやうに手帳をひろげ何か心覺えを書いてゐる。

「ぢやあ、」といつて杉村は立ち上り、階段のところまで行つてちらりと小泉の方を見た。何か心惹かるる

ものがあつたのである。下へ下りてみると留守居の青年が前後不覺に眠つてゐる。外は暗く風が吹き荒んでゐた。自轉車を走らせ半町ほど行つてふりかへると、高臺の家はちやうど灯りを消したところであつた。

表戸をあけ、土間を見ると足の入れ場のないほどの履物である。これは意外だつた。時間は遲いし、今日の集りは半分投げてゐたのにと思ひ、大西がうまくやつてくれたのだなと思ふと、たのもしくありがたい氣持だつた。自轉車を狹い土間に引き込み、ゴトゴト音をさせてゐると、二階から下りてくる音がし、中程に足をとめて、「誰あれ？」と上からもれる明りにすかして見てゐるやうであつたが、僕、といふと、ああ、杉村さん、と大西が下りて來た。

「御苦勞さん、みんな集まつた？」といつて段にのぼらうとする杉村にパツと飛びつくやうにしてその手をしつかりとおさへると、ものをもいはず、ぐんぐんともとの入口の暗がりの方へ引つぱつて行くのである。どうしたんだ、どうしたんだ、といひながら杉村はついて行つた。

「杉村さん、敗けたんだつてね。」と低いささやくやうな、しかしひた押しに感情をおし殺さうと焦つてゐる聲である。

「敗けたよ、仕方がない、それで……」

「弱つたなあ、杉村さん、」

「ええ？」といつて杉村はなんといふことなしにどきんとした。

「組合は割れるね、わるくすると。」

「なんだつて、」

「まるで沸いてるんだ、二階の連中は！　一杯機嫌でやつて來るのが多くつてねえ、すつかり不貞腐れてゐるんだ。だからいはんこつちやない。土地のものをナメやがつて選擧なんかに勝ててたまるもんかい、ざまア見ろつて惡口雜言さ、敗けたのを口惜しがつてゐるどころか痛快がつてゐるんだ。むしやくしや腹をどこにも持つて行きどころがないもんでわしひとりにつつかゝつて來る始末さ。今晩の會議なんてとてもものにやなりませんよ。先生は顏を出さない方がいいかも知れない。やつぱり失敗だつたかなあ、杉村さん、地元から立てずに島田さんを立てたのは……」

「默れ！　餘計なことをいふな。」といきなり杉村は呶鳴つた。意外な彼の興奮におどろいて大西は口をつぐんでしまつた。

その暗闇のなかにだが杉村は顏いろを變へたのである。おそれてゐた不安がこれほどまでに早く現實のものとして迫つて來ようとは思はなかつた。あたりはしーんとし、耳を澄まして聞くまでもなく、二階で何かののしり笑ひさざめいてゐる聲は明らかにいつもとはちがふのである。……杉村は逡巡した。がすぐ氣を取りなほし、今來た、といつた氣輕さをよそほつてとんとんと階段をのぼつて行つた。うしろで大西が何かあわただしく小聲でささやいたやうである。

「やあ、失敬々々、すつかりおくれつちまつて。」

と障子をあけるなり杉村はいひ、わざと無雜作にそこに鞄を投げ出した。何ごともなかつたふうに平氣をよそほひ、何ごとにもこだはらぬ態度を全身をもつて示してゐるのだが、顏の筋肉が硬ばり、へんにゆがむのをどうすることもできなかつた。

障子をあけた瞬間になかでの話はひたと止んだ。杉村はそこへ坐つたが誰もものをいひかけて來るものは

ない。廣くはない部屋に膝をつき合して向ひながら、一口もいひ出すもののないほどの氣づまりはない。おそろしい暗默の敵意である。どつちか先に口を切つた方が敗けであるやうな沈默の抗爭である。——杉村が敗けた。

「今日は馬鹿に集まりがいいね。……今晩は會議の形式はとらずに選擧の結果についてお互ひに意見を述べあひ、今後の對策について相談しあはうぢやないか。敗けたのはまア仕方がないとして。」

いひながら刺すやうな多くの視線をからだ一杯に感じ、それまでうつむいてゐた杉村はそのときはじめて顏をあげて一點を見た。かつちり視線の合つたのが、ほぼ正面に坐つて、臆することなく眞直ぐこつちに顏を向けてゐる石川剛造であらうとは！　勝利と侮蔑と嘲笑と憎惡との錯雜にゆがんだ表情は、復讐の快よさのうちにふしぎな統一を見出してゐる。杉村は今はとめどもなくべらべらとしやべり出すことでおのれの氣弱さを蔽はねばならなかつた。だがそれに應じてくるものは一人もなく、しかし彼らは彼らだけの言葉と表情で勝手にしやべり始めたのである。—

「まるまる一ケ月まるで阿呆な暇だれをしてしまふたのう。」

ほーつと肩でする思はせぶりな太い息と共に吐き出したのは、組合の政治部員と黨の幹部を兼ね、今度の選擧には辯士隊の一人であつた山田三次である。

「山田なんざあまだいいわ。もともと口が達者で演說が飯より好きに出來とる男ぢやてのう。今度といふ今度こそはしつかとたんのうするまでしやべつたやらうに。第一やることがはでぢやわ。——わしを見んかい、わしを！　一日ぢゆう机の前に坐らせられてよ。鋤鍬持つ手に筆を持つてよ。飯代がいくら、人夫賃がいくら、紙がいくら、墨がいくら、何がいくらかにがいくらと帳面つけぢや、それがてんでお日さんにも當らず

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com